



逆さかばしら 柱

はじめに

古来、日本には「盛りを過ぎれば、衰えるのみ」という考え方がありました。例えば吉田兼好は「徒然草」で、「天に昇りつめた竜は、あとは下るだけなので悔いがある。月は満ちれば欠け、物は盛りが過ぎれば腐るだけ。すべてのことは、先が見えてしまえば、崩壊の時も近付くということだ」と述べています。

こうした考えは、建築にも反映されており、同書でも「何事も完璧に仕上げるのはよくない。造り残した箇所をそのままにしたほうが面白く、生き延びる術となる。内裏を造る際にも必ず造り残しをする」という魔よけを紹介しています。建築を完璧に仕上げることはさげ、いまだ盛りを過ぎない状態を保ち、建物の恒久安寧を願ったのです。そして、こうした魔よけの一つに、柱をわざと逆さまに建てるという

対処法は？

このように同じ逆柱でも、正反対の結末を招いてしまうのでは、信心深い人はどちらを信じればいいのか迷ってしまうでしょう。山片三郎の『建築徒然草』では、ある家相書に書かれた対処法を紹介しています。「家屋建築には、材木の逆柱はもちうべからず。世の中には、その普請が完全で、あまり良すぎると、満つれば欠くの理で、かえって悪いと見做して、わざわざ逆柱を用いる人もあるが、これは誤りで、禍の生じるものになる。もしも、そのような心配をするのなら、柱か梁の一本を、桧か桐を使うところを杉にでもかえれば良い」

この他にも、一本か二本だけ、わざと節だらけの柱を使う例もあるそう、要するに「完璧」な仕上がりを避ければよいようです。

迷信である

一方、秋田の大工職人である佐々木藤吉郎は、逆柱などは単なる迷信と考えていたようで、著書『秋田の大工職人』にて次のような話を紹介しています。

大工の棟梁がある家を新築したときの話である。その家の主人は評判のケチだったので、工事にかかってから大工はもちろん、人夫たちにお神酒を飲ませることがない。地祭の

「逆柱」、「逆さ柱」があります。

逆柱の例

逆柱の例として有名なのは、日光東照宮の陽明門の柱で、「グリ紋」と呼ばれる渦巻き模様彫られた白い柱のうち、模様が上下逆の柱



櫻山八幡宮の逆さ桐の石燈籠 中央の桐の模様が逆さまになっている

お神酒も、毎日のタバコ休みにお茶、お菓子、何ひとつださない。いくらケチでもほどがある。大工たちは逆柱を立てて仕返すことにした。さて、工事が完成したおり、あらためて家主が言うには、工事中は何ひとつ馳走せず、申し訳なかった。このお金はご馳走すべきお神酒、お肴、茶代などの何十回分だから、みんなで分けてほしい。

こう言われて、困ったのは大工たちだ。いままさら仕返しに逆柱を立てたとはいえず、かといって良心の呵責にたえられない。やはり正直に話すことにした。

黙って聞いていた主人は、その逆柱はそのままにしてくれ。これで俺の家は家運長久、子孫繁栄だ。上り下りあってこそ俺の家は万代不易だ。この主人は災い転じて福となしたのだ。

考え方次第

このように逆柱には、縁起がよいとする一方で、悪いとする考えもあります。同じ事柄でも相反する捉え方をするのは、迷信にはままする話です。例えば、「夜の蜘蛛は縁起が悪い」といわれますが、私は子どもに「夜蜘蛛来た」「よくも来た」「よく来た」なので、縁起がよいと教わりました。インターネットで調べても、語呂合わせから縁起

が1本あります。

そのほか、柱以外でも模様の一部を逆さまにする方法もあったよう、例えば飛騨高山の櫻山八幡宮には、一箇所だけ桐の模様彫られた「逆さ桐の石燈籠」があります。これも逆柱と同じく完璧に仕上げることを避けるための呪いです。

縁起が悪い逆柱

しかし、全く逆に逆柱は縁起が悪いともいわれ、とくに家相学では避けるべき凶相とされています。木が生えていた方向とは逆に柱を立てると、夜中にミシミシ鳴るとか、家鳴りがするほか、不吉な出来事を引き起こす原因になるといわれています。これは怪談にも取り上げられ、忠雪山人の『古今怪談百物語』では次のような話を紹介しています。肥後熊本の金持ちが、家を新築

がよいとする同様の意見が見られます。ほかにも葬式に行き逢う、霊柩車を見たなども、縁起の良し悪しはわかれます。つまり「秋田の大工職人」で紹介された話ではないですが、禁忌にかかわるこうした迷信は、当事者の心得次第で如何様にもなるのでしょう。

逆柱の根拠はないのか

ただし、そういつて終わらせてしまっても味気ない気がします。逆柱は縁起が悪いという何らかの根拠はないか考えてみたいと思います。例えば、清家清の『家相の科学』によれば、「杉や檜の丸太切り口を見ると、中心に近い部分は赤く、外皮に近い周辺部は白いことがはつきりわかります。中心部は堅くて腐りにくく丈夫です。この部分は、その色から「赤



丸太材断面 赤味と白味の差がはっきりとわかる

した。普通の農家とは違い、実に立派な家だった。新築の祝いも終わった真夜中のこと。四方の雨戸がカタカタと鳴り出し、間もなく家全体が震動しはじめた。そればかりではなく、家がグルグル回りだし、さらに上下動をはじめたので実に耐え難かった。

それで村の血気な若者2人と、巡査、それに家を建てた棟梁の4人がこの屋敷に泊まりこんで正体を見極めることになった。

すると、やはり、同じように家が鳴り、上へ下へと動き出す始末。棟梁は「イヤ私は思い当たることがある」と夜の明けのを待って、家中の柱を確かめてみると、柱の一本が逆さに建てられていた。早速、家主にこのことを告げ、柱をなおすとその後は全く異変があらなくなった。

身」とか「芯材」と呼んでいます。これに対して、周辺部は水気が多いために乾燥による収縮を起こして狂いが生じ、また腐りやすいのです。この部分を、「白太」あるいは「辺材」といいます。木材は元口(木の根本側)には芯材が多く、末口(木の梢側)には辺材が多いので、元口のほうが丈夫です。だから、元口を下にするのが、より安全だというわけです」とあります。

秋田県の大工職人、菊池修一が著した『木の国職人譚』でも、「クリは腐らないと言われておって、家の土台なんかに使われていたわけですが、なんぼクリが腐らないといつても、白味と赤味があるわけだから、白味部分は早く腐っていくわけですから、どんな木でもそうなんです」としており、赤味の部分は長持ちするから価値があると結んでいます。

おわりに

実際、赤身みの木材は「赤無垢」と呼ばれる高級材で、赤白まじったものが一般的らしく、とすれば、なるべく赤身が多い根本側を、乾湿を繰り返すことで腐りやすく、生物劣化も起こしやすい地面側に据えつけることは理にかなったように思えます。逆柱はこうした経験則を伝えていたのかもしれない。

(文：江口知秀)

鳥山石燕 画図百鬼夜行 逆柱 (川崎市市民ミュージアム 所蔵)